

概して強い負うず域の風下(上)の領域となっている。第1表のような負うず域や流れが上層高気圧域である期間持続し、ほぼ定常状態を保つ場合には、たとえば、強い負うず域の風上では流跡線に沿って気塊は弱い負うず域から強い負うず域に向かうので、うず度方程式から水平発散が期待される。上層の水平発散は、下層の水平収束と結び付く場合には下層の低気圧性循環や前線活動に寄与し、盛夏期には低温が現われやすい。強い負うず域の風下では上記と相反する状況が想定される。第1表の1973年8月14日～9月2日の半旬別経過(力武, 1976)では、100mb面でうず度分布や流れがほぼ定常状態を保っていたが、他の事例については、さらにパターンの持続性について調査する必要がある。また、上記のような盛夏期の天候と上層高気圧の特徴の関係を理解するためには、さらに中～下層を含めた3次元解析と力学的な検討が必要と考えられる。

終わりに、長期予報に関する調査に際し平素御指導を

いただいている気象庁長期予報課の方々と名古屋地方気象台の方々に対し深く感謝する。

文 献

堀竹昌治, 根山芳晴, 1976: 100 mb 循環場よりみた西日本の暑夏冷夏の特徴とその予測について, 天気, 23, 441～446.  
 能登正之, 山崎 学, 1976: 亜熱帯高気圧の変動と相互作用, 全国長期予報技術検討会資料(気象庁予報部), 16～27.  
 力武恒雄, 1976: 昭和50年夏期の天候と南アジア上層高気圧について, 東京管区地方気象研究会誌, 9, 101～103.  
 ———, 1976: チベット高気圧と暑夏年の天候について, 全国長期予報技術検討会資料(名古屋地方気象台), 10～15.  
 ———, 1977: 1971年8月の上層風分布の特徴, 全国長期予報技術検討会資料(名古屋地方気象台), 15～18.

日本気象学会誌 気象集誌

第 II 輯 第55巻 第2号 1977年4月

浅井富雄・中筋 勲: 条件付不安定大気中における湿潤対流の卓越モードについて……………151-167  
 S. Hastenrath: 熱帯海洋の熱収支における東西の非対称について……………168-173  
 会田 勝: 積雲群からの日射の反射……………174-181  
 横山長之・蒲生 稔・山本 晋: 混合層における乱流変動量について……………182-192  
 北林興二: 山岳風上側よみ流の風洞による研究……………193-204

要 報 と 質 疑

Y. Yamazaki and V.B. Rao: 南太平洋上の熱帯雲分布について……………205-207  
 正 誤 表……………208